琉球大学学術リポジトリ

『遺老説伝』における史話と史伝

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2015-11-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 前村, 佳幸, Maemura, Yoshiyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32646

『遺老説伝』における史話と史伝

前村 佳幸 *

The Historical Tales and Figures in *Iro-Setsuden*

Yoshiyuki MAEMURA

Iro-Setsuden, a book written in classical Chinese, contains many folk tales created by rewriting documents written in the old Japanese epistolary style (sorobun). These documents were submitted by local officials to the Shuri government in the former part of the 18th century. This paper translates some original texts (seven stories selected out of approximately 140 stories) into contemporary Japanese, and examines the context of *Iro-Setsuden's* contents, by focusing on the tales on historical events or persons of ancient Ryukyu. The examination suggests that these historical tales include subjects of virtue or ethics. This is important in understanding this book with regard to the purpose and significance of its compilation among other history books of Ryukyu.

問題の所在

琉球において史書が編纂される以前、16世紀から17世紀前半にかけて古謡集『おもろさうし』が3回にわたって集成された。その内容について、外間守善氏は、王府オモロ、地方オモロ、特殊オモロに分類している[1]。第1は、主に聞得大君(首里大君)と尚真王(おぎやか思い)を賛美するものであり、なによりも王府オモロが尊ばれていたことがわかる。薩摩服属後には、第22に至る多彩なオモロが集成されることになった。地方オモロは、先島と大島を除く、後に首里王府の版図に入る、各地の繁栄を称えるものである。『おもろさうし』では、中城グスクと勝連グスクの落城のような具体的な事件を扱うのではなく、その支配者の耀きを謳うことで、間接的に首里の卓絶した地位を賛美し正統化する構造がみられる。

そして、王の在位期間をもって紀年とする『球陽』では、北山や先島など、主要な地域が中山の首里王府によって征服されていく過程、第一尚氏期における中山の内部抗争も時系列をもって掲載されている。確かな史料がなく、推測を交えて叙述を行う際には「遺老伝」を附記するけれども、それは編年上の記事と関連づけられている。

かつて、南島の津々浦々に「てだこ」「世の主」などと称する支配者が存在し、その地域の人々によって継承されてきた神歌がオモロとして集成されたのである。地方オモロからは第一尚氏期以前に各地の小支配者が「下の世の主」「按司の又の按司」などと謳われる広域的な権力によって統合されていく趨勢は垣間見えても、具体的な政治的過程を示すものはほとんどなく、これを時系列に沿って並べ替えることは困難であるように思われる。

他方において、編年体系の史書『球陽』の外巻として、『遺老説伝』と題する書物は、地方から提出された旧記と呼ばれる伝承を参照しており、しかも詩歌のような表現上の制約がないのでオモロよりも具体的な歴史的内容や人物像が記述されているはずである。ただし、その説話は、『球陽』『中山世譜』のような史書において「遺老の伝」として示され、その歴史叙述を補完するものではなく、あるいは首里の中央集権的な時系列に整合的に位置づけることよりも、別の意義が重視されていたのではないだろうか。そのような説話は、旧記にある内容をそのまま整理して漢文化したの

* 琉球大学教育学部社会科教育専修所属

ではなく、むしろ編纂者の意図によって換骨奪胎されていることが想定される。そして、この差異こそ、中央の立場から『遺老説伝』などを編纂し、それを参照してきた近世琉球の人々の歴史観の一面を浮き彫りにするのではないだろうか。小稿では、このような性格を有するとみられる説話を「史話」「史伝」と位置づけ、一見雑多な内容の中から、地方と首里王府との関係を特に示すものを選び出して検討を加えたい。なお、各話は冒頭に「・」が附されて区別されているが、本稿では10番目を第10話と第11話としている。

1.　久高島

久高島はかつて隔年ごとに王と聞得大君が渡海して行幸した聖地であり、それは康熙12年(1673)以降、弁が岳からの遙拝に代わるまで挙行されたし、聞得大君の斎場御嶽から久高島に向けた祭祀（御新下（おあらおり））も大がかりなものであった。そして、『おもろさうし』には、久高島から首里王府の繁栄を祈る外間大屋子のオモロが掲載されている（第10の551）。『遺老説伝』にも、国家的祭祀の重要な対象でありつづけた久高島に関わる説話がある（巻2第74話）。

往古の世、玉城間切の百名村に一人の男がいた。童名は白樽といった。生まれつきこの上なき孝行者で、堅く守る心中には仁義があった。つねに善事を行い、悪事をはたらくことなどなかった。玉城按司は彼のことを大変褒め称え、ついに長男の免武登能按司（みんとんあじ）の娘を彼の妻として娶らせた。ある日、夫婦で野登山に出て景色を楽しんだ。ふと東の海上を見ると、一つの小島があった。波濤の間に人知れずあるのが見えたのである。白樽はとても不思議に思った。時々、その野に出かけて念入りに観察した。天気快晴で雲もなく、風が穏やかで波も静かな時に見ると、それは現実の島であった。海によって隔てられているがかなり近い。この時、世間では威勢を争い戦が絶えなかった。ここにおいて、白樽はこの世の変乱を強く厭い、この島に逃避して暮らしたいと思った。このことを夫婦で相談して決めてから、小舟に乗り東に向かってこぎ出すと、瞬く間に島に着いた。舟を繋いで上陸し、島の四隅をくまなく巡り歩いてみると、泉の水は甘く土地は肥え、野原は広くて山は低く、村を立て家を建てて終の住所とするのに相応しいことが分かった。しかし、その時は食物がなく、毎日、海辺に出て螺貝を集め、一日一日を過ごすしかなかった。そこで、夫婦はともに伊敷泊に行き、子孫繁栄、食物豊穣を祈願した。まだ祈り終わらない時、ふと見ると白壺が一つあった。波間を漂いこちらに近づいて来る。白樽は衣をまくり上げて海に入り、その壺をすくい取ろうとしたが、波の間に沈んで見えなくなってしまった。婦人は屋久留川に行き、沐浴してから清浄な衣を身にまとった。そして、また伊敷泊の浜に行き、袖を広げて白壺を待った。すると、白壺がおのずから袖の上に来た。婦人は喜んでその壺を取り、その蓋をこじ開けてみると、その中に麦三種（一小麦、一葉多嘉麦、一大麦）、粟三種（佐久和、餅也、和佐）、豆一種（俗に小豆と呼ぶ）が入っていた。そこで、この種を古間口の地に播いてみた。正月の時期になると、麦の穂が出てきたが、全く尋常ではなかった。白樽はこれをとても不思議に思い、これを禁城に奉献することにした。二月になると、その麦は熟していた。恭しく吉日を選び、その麦を王に奉献した。王は非常に喜び、これをおしいただいた。そして、神酒を醸させ各地の森嶽に奉り、さらに職工にも賜った。それより以来、この島では五穀豊穣、子孫繁衍となり、ついに村として、これを名づけて久高島というようになった。

白樽の長女於戸兼（おとがね）は専ら祝女の職を任い、各嶽の祭祀を掌った。長男真仁牛（まにうし）は父の家統を継ぎ、その子孫は今の世に続き、これを外間根人という。二女思樽（おみたる）は巫女となり、ついに禁城の巫女に抜擢された。日夜城内に控え、その人となりは、節操堅くおしとやかな性格で、その美麗な容貌は常人と全く異なるものであった。王は内宮に召し入れ、王の夫人とした。深く寵愛を受け、はなはだしい身の誉れであった。やがて思樽は懐妊した。これを見て、側室たちは思樽に嫉妬して憎み、彼女

と言葉を交わそうとしなかった。ある日、はからずも思樽夫人は放屁してしまった。側室たちは欣喜雀躍としてこれを喜び、その過失についていつも話し合いあざけり笑った。思樽夫人は御前に出ることができなくなり、ついにお暇乞いし帰郷することになった。

光陰矢のごとく数ヶ月が経ち臨月を迎えた。思樽は聖主の後胤であることを慮り、産座（うぶざ）が清浄でなければ罪を犯すのではないかと恐れ、別に一座（外間根人の家には当時の産座がなお現存している）を設けて一男を生み、金松兼（かねまつがね）と命名した。成長して七歳になると、しばしば母に父のことを尋ねた。思樽兼夫人は、あなたには父がいないので、わたし一人で生まれてきたのだと答えるだけであった。八歳になると、しきりに父親について聞き、こう言った。「天は陰と陽によって万物を生育するものである。ましてや人にはみな父母がいる。どうして自分には母一人しかおらず父がいないのか。自分の父のことについて是非とも教えて下さい」。思樽夫人の答は同じであった。金松兼は再三強い調子で問うたが、それでも思樽夫人が教えることはなかった。思金松兼（おみかねまつがね）はこう言った。「人として父を知らないのであれば、人ではいられない。生きていて意味がなければ、どうして早く死ねないのだろう」。ついに朝夕絶食し声を上げ激しく嘆き悲しんだ。ここにおいて、思樽夫人は絶食している思金松兼の姿を非常に憐れみ、ようやく寵愛を受け嫉妬された顛末を詳しく話してやった。しかし、このように言い渡した。あなたはもともと海島に生れ、その衣服や風貌は都の人と同じではない。天顔を拝見する願いがあっても、とうていそれを叶えることはできないのです。だから、前々から聞いても話さなかったのです。

思金松兼はこれを聞くと、ただちに伊敷泊に行き、東方を仰ぎ向いて言った。「母は、王の側に侍り、おのれを身ごもった。思いがけずわずかな過失があって、病だと申し上げて帰郷した。今、自分は田舎で成長し、心やすらかではありません。伏して天神と地祇にお祈りします。この真心に鑑み、この幼き子供に憐れみを垂れて、聖主に謁見することを実現させてくれたら、決して尽きることのないご恩となるでしょう」と。毎朝告祈し決して怠ることはなかった。こうして七日になると、明け方に黄金の何かが一つ出て来た。輝かしい光を強く発し、波間を漂いながら浮上して近づいて来る。思金松兼はこれをたいそう不思議に思い、衣の袖を広げてそれをすくうと、黄金の瓜子であった。思金松兼は大いに歓喜した。すぐにこの瓜子を抱き、都に行くと母に伝えた。即刻旅立ち、禁城に参上して朝廷で謁見しようとした。禁城の役人は、髪が赤く衣服が粗末なのをあざ笑い、ある者は癩病の子供がみだりに城内に入ろうとすると見て叱責した。しかし、思金松兼の容貌には恭しい礼節が備わっており、その物腰はおだやかでゆったりとした様子であった。少しも怯えてうろたえた気色はなく、ひたすら参内して題奏することを願った。役人たちはとても奇怪に思い、ついにこのことを内院に上申し、御前に召し入らせた。思金松兼はすぐに件の瓜子を懐中から出し、それを献上してこう言った。「この瓜の種は、国家の至宝であり、世界にまれにしかないものです。大地をおおう天が恵みの雨を降らし、肥沃な土地が潤った時、ことにいまだ放屁したことのない女にこの種を植え付けさせれば、大いに広がり繁茂し、とても沢山の実を結ぶでしょう」。王は大いにこれを笑い仰せた。「人としてこの世に生れて放屁しない者がいるものか」。思金松兼が言うには「人は放屁するのに、どうしてそれが咎められるのでしょうか」と。王はその言葉を聞くと、奥の内院に移り、そこに思金松兼を召し入れ、ひそかにそう申す理由を尋ねた。思金松兼は母が放屁して帰郷し、自分を生んだ経緯について詳しく申し上げた。王はその事を聞くと、思金松兼を城内に住まわせようと思召された。しかしながら、東海の小島で生まれた、賤しい田舎の子供ということで、急に身分を上げて王の息子とするのは難しかった。そこで、しばらく故郷に帰し時期を待つことにした。その後、王に世継ぎがなく、ついに思金松兼を呼び寄せて封

じて世継ぎとし、やがて思金松兼は大いなる位に即いたのである。これにより、二年に一回、聖主はみずから久高島に行幸し、さらに毎年一回、外間根人ならびに祝女が御仲門より魚類数品を恭献すると、祝女を内院に召し入らせて盛宴を賜り、茶やたばこ等を恩賜の品として与えた。根人も御玉貫一双を賜った。なお、康熙庚子の歳（59年：1720）には、そうした献上の制度を廃止したという。（『遺老説伝』巻2第74話）[2]

これとは別に、道光27年（1847）の「久高島旧記」が存在する[3]。この年代が撰述された時期なのか転写された時期なのか注意を要するが、その内容からして、小島瑛禮氏の指摘の通り、他の旧記のように『遺老説伝』の原話となったものではなく、むしろ『遺老説伝』の内容を和文化したものと考えられる。明治期、久高島を訪ねた田島利三郎が書写したテクストは外間根人所蔵の原書からのものとみられる[4]。

なお、『琉球国旧記』では、白壺をめぐる部分で天孫氏の時代の老夫婦「阿名具之子」「阿名具之姥」とする「俗説」のみ掲載している。また、琉球処分後の「同治13年」の「聞得大君御殿并御城御規式之御次第」（明治17年：1880）でも、「久高之大主」が五穀の種子の入った小壺を見つけて、島で育てた種を天孫氏に献上したとある。これに対して、『遺老説伝』と「久高島旧記」では、さらにその後の展開が述べられている点に注目したい。つまり、外間根人の次女が「禁城」に出仕して王に寵愛されて懐妊するが、宮中での嫉妬にいたたまれなくなって島に戻り、そこで金松兼（思金松兼）を産み育て、まだ幼い金松兼が堂々と王の前に名乗り出て、やがて王位を継承するというものである。つまり、外間根人は王の外戚となるのであるが、この王がいかなる王統に位置するのかよく分からない。「禁城」とのみ記される王城の所在地は、首里と解してよいのだろうか。ここで、白樽に妻を娶らせた玉城按司の地域に注目すると、『おもろさうし』第6の309では「島中」と称えられており、久高島の根人（草分け）の夫婦で妻の方が高貴な出自であって、穀物の種子という価値あるものを夫ひいては国にもたらす点は、農夫の子でありながら、勝連城主の前に罷り出て、その娘の見立てで夫婦となり、妻が黄金を見つけ出し王への道を歩んだ察度王の伝承と類似するところがある[5]。

久高島が特別な祭祀上の地位を有するようになったのは、『遺老説伝』によれば、金松兼が王に即位してからのことだという。しかしながら、『球陽』の編纂者がその記事を時系列上明確にすることは困難であったと考えられる。『中山世譜』を参照すると、第一尚氏では王の童名も王母や妃の名も全て「不伝」である。『おもろさうし』には越来世の主が尚泰久王（真太求思い）の外祖父にあたると解せるオモロがあり（第2の78）、これを史実とすると、越来按司の娘が尚巴志の妻妾であったことになる。また、『中山世譜』では「遺老の伝に云う有り」として、尚泰久王が越来王子であった時に「世理休」を妾とし、その間に儲けた子が「江洲按司」（江洲は第16にオモロあり）と称されたという説を紹介しているが、「虚実弁じ難し」と断っている。出自の客観性の点では、英祖・察度をそれぞれ祖とする中山の王統も居城も定かでない南山王も同様であろう。このような古琉球の王統譜に久高島出身の金松兼が王になったという出来事を位置づける余地はない。それだけに、『琉球国旧記』のごとく上古の天孫氏の時代とした方が無難だったのだろう。

ただし、島での祭祀は金丸が尚徳王に仕えていた頃には既に「先王ノ制」（『中山世鑑』巻4）とされていた。『遺老説伝』巻2第74話は、『琉球国旧記』と同じように「往古之世」のことと断ってはいるけれども、近世琉球の人々にとって、実際に存在する慣行や国家的制度の由緒をより強く感じさせる史話として構成されている。現存の「久高島旧記」が『遺老説伝』を参照して成立したものならば、島の人々にとって、それがより好ましい内容であったからではないだろうか。

さらに、久高島については、聞得大君が自ら島に渡って祭祀を行っていた時代を示す話もある（附巻第134話）。ある時、聞得大君が久高島に渡ろうとして大和に漂流してしまい、その後、琉球中に旱魃が生じた。そこに、君摩物（キンマモン）の神が出現し、その行方を知らせたので、場天祝女らが船を出して迎えにいき、無事帰国したものの、王城には戻らず、与那原で余生を送ると

いう筋である。

往昔の世、聞得大君加那志が侍女数十人を引き連れ、船に座乗して久高島に赴き、祭祀を執り行おうとされた。沖に出ると、にわかに逆風に遭い漂流して日本に行き着いた。それから、歳月が経ち、杳として行方知らずとなった。この時、琉球では旱魃が非常に厳しくなり、五穀は収穫できず、人民は困窮した。これにより、覡巫を招集し、何度も何度も問うと、覡巫みな言うには「このことは、聞得大君加那志が風によって漂わされ他国に滞在されているからです」と。ある日、君摩物の神が在らせられ、次の様に仰せた。「今、大君加那志は日本に逗留されています。汝らは速やかに日本に向けて出航し、お迎えしなさい」。こうして、場天祝女は命を奉り船頭となり、大城祝女を副船頭とした。そして、女人数十名を引き連れ大洋に出航した（場天祝女は出航の際、沙明川の許しを得てから出発した。沙美川とは場天祝女の父のことである）。日本国に向かうと順風となり、日日もかからず、すぐにとある場所に到着し、つつしんで大君の尊顔に見えることができた。場天祝女は御前にぬかずき、こう言った。「わたくしどもが思い切って此の地に来たのは、大君加那志をお迎えに参上したからです。すぐお帰りになることをお願い申し上げます」。こうして大君加那志は場天祝女らとともに帰帆し、ある浜（斉場御嶽下の待垣泊（まちがきとまり）に帰着したという説がある。どちらが正しいのかいまだに分からない）に帰って来た。浜辺では、祝女の父がうやうやしく酒杯を献じ、お迎えの喜びを示した。しかし、大君加那志は居るべき所に帰ることを願わず、大里間切の与那原村に宮舎を構え、ずっとそこで暮らし、後にここで薨去された。そこで、その御霊骨を収めて三津嶽に埋葬した。人々は尊信して神としている。

また云うには、多志好魚は、もともと琉球の海にはいない。場天祝女が日本よりこの魚を持ち帰り琉球の海に放してやった。これにより、場天祝女が馬天の浜に居る時には、この魚は場天に浮上して出て来た。また与那原に居る時には、その浜に出て来た。この祝女の居場所に応じて起き上がって来たのである。（『遺老説伝』附巻第134話）[6]

キンマモンは琉球固有の神として、慶長年間（1596～1614）に来琉した袋中上人の『琉球神道記』巻5に言及されている。それは「守護ノ神」であり「海底ヲ宮トス。毎月出テ託アリ。所所ノ拝林（オガミバヤシ）ニ遊給フ。七年一回ノ新（アラ）神ハ、二七日ノ御託ナリ。遠海諸嶋、僉（セン）議ナクシテ、同日同時ノ出現ナリ」とあり、至るところに出現する[7]。「神離給フ則（とき）ンバ、女等径（タダ）チニ死ス」とあるのは、特定の女性を介して神のことばを伝える存在であったことを示す。託女とはめかんなぎのことである。そして、「託女三十三人ハ皆以王家也。妃モ其一ツナリ。聞得君ヲ長トス。都（すべ）テ君ト称ス。此外、夷中辺土ノ託女ハ、数モ定リナシ」とあり、その祭祀は聞得大君を頂点とする女官が執り行うことになっていた。

『遺老説伝』の説話では、斉場御嶽も言及されているけれども、与那原に聞得大君を連れ帰った場天祝女の由緒が主題のようである。なお、場天祝女の父沙明川（沙美川、沙明嘉）は、第一尚氏初代の尚思紹王の父でもある（『佐銘川大ぬし由来記』琉球大学附属図書館伊波普猷文庫）。歴代の聞得大君の御新下では、斉場御嶽への途上、必ず佐敷間切の馬天浜を通過し、場天（馬天）のろくもいのもてなしを受ける慣例があった。『琉球国旧記』では聞得大君が王城に戻らず与那原で亡くなったことについて、「俗説」として、「宮舎」を「小庵」に置き換えている。また、その霊骨を祀ったという「三津嶽」について所在を記載していない。聞得大君が琉球全土の最高神女となる過程は、第二尚氏による中央集権化と並行している[8]。この説話は、なぜ聞得大君が久高島に渡海しないのか、実際の経緯とは別に近世の制度の由来を伝えている。

2. 久米島

首里の西方東シナ海上にある久米島には宇江城（中城）と具志川の二大城趾があり、『おもろさうし』には島の支配者を「中城思い」「肝高の思い」（第11の575）と称えるオモロがあり、第21（1623

年編纂）は「くめの二間切おもろ御さうし」である。沖縄本島の中城グスクは第一尚氏期の内乱で尚泰久王5年（1458）に落城したとされ、久米島の中城は17世紀末に間切名に因んで仲里城と改名されるまで、その名を止めていた。『球陽』では、具志川グスクの城主真仁古樽按司（伊敷索按司の次男）が中山の軍によって滅ぼされた時期について、その棺桶の中国年号から尚真王30年（1506）以降と推測している。これは、島の最上級祝女である君南風が参加した尚真王24年（1500）の八重山征服後の事件であり、中山が中国に朝貢した洪武年間（1368～1398）には服属していたという編纂者らの認識と齟齬を来すため、「歴世已及、莫従稽詳」と結んでいる。

『遺老説伝』には、「往昔之世」に島を支配していた伊敷索按司と四人の息子と中城・具志川の落城に関する説話が三つある。その資料とみられるのが、乾隆8年（1743）に王府に提出された「久米島仲里間切旧記」と「久米島具志川間切旧記」である。それに記される地域の伝承は『遺老説伝』において、どのような史話・史伝として構成されているのであろうか。

「久米島具志川間切旧記」では、伊敷索按司の長男を中城按司、次男（まによく樽按司）を具志川按司としており、『球陽』と符号する。この次男が二代目の具志川城主「まかねこ」を追い払い、具志川按司と称するようになったと旧記は述べる。「いしきなは」の出自については、「御元祖委敷（くわしく）相尋候得共、年来久敷（ひさしく）故不相知候」と断っている。この点、『遺老説伝』巻1第48話も同じであるが、長男を「兼城大屋子」、妾腹の三男「さすちやら」を四男「笠末（ママ）若茶良」としており、違いがある。

> 大昔のこと、伊敷索按司（いしきなわあじ）という者がいた。いかなる者の末裔なのか誰も知らない。久米島の長であり、四人の息子がいた。長男の名は兼城大屋子といった。兼城村で土地の善し悪しを占い、そこに住居を構えた。今の久米島御蔵の地である。次男は仲城按司と称した。仲里城を築き居城としていた。三男は具志川按司と呼ばれ、具志川城王［城主カ］であった。四男の名は笠末若茶良（かさすわからりや）といい、登武那覇（とんなは）の地に住んでいた。彼らの父伊敷索按司は、中山が久米島を征伐した際に官軍によって滅ぼされ、その遺骸は伊敷索山に葬られた。後の人はそれを尊信して神嶽とした。嶽には三つの神がいらっしゃる。一つは久米の世の主の伊部と云い、一つは阿武来指笠（あよらいさすかさ）の伊部と云い、一つは豊添（とよむす）の君の伊部と云う。（『遺老説伝』巻1第48話）[9]

伊敷索按司の出自については、『おもろさうし』第10に本島南部の摩文仁の「いしけした（伊敷下）」と久米島の「いちなは（伊敷索）」の浦を称える二つのオモロがある（538と539）。「久米島具志川間切旧記」によれば、兼城大屋子は伊敷索按司の娘婿であって、娘がきょうだいの最年長であれば、その夫の兼城大屋子が伊敷索按司の長男にあたるという解釈も可能ではある。その子孫について同旧記は「在所も本与不相替于今有之候」というので、中山による征服の際に滅亡せず存続したことが分かる。そして、この部分こそ、つとに伊波普猷らが指摘しているように[10]、久米島が首里王府の知らない間に本島中南部あたりから渡来した按司によって征服されていたことを示す証左なのである。

首里王府による久米島の征服について、『球陽』巻3尚真王30年（1506）の附「久米島始建具志川城」は具志川城の興亡について述べるのみである。『遺老説伝』巻1第49話では、中城を攻めあぐねた中山の軍勢が具志川に矛先を変えるとほどなくして陥落し、それを見た中城按司は後事を「堂（どう）の比屋（ひや）」に託して行方知らずとなったと述べ[11]、ここに伊敷索按司の勢力が滅びたという認識が読み取れる。

> 往昔の世に、久米島の儀間村に仲城按司という者がいた。彼こそすなわち伊敷索按司の第二子である。まだ按司でなかった時分、太城山に城を建て、石を運び垣を築かせようとしていた折り、突如一婦女（その名を音知小堂（おとちこ）の比屋の婢女という。比屋から逃げ出して隠れ住んでいた）が嶽の中から出て来た。按司に告げ「わたくしが、この地を熟視しますと、仲城山をしのぐところはありません。この山は、巍巍として高くそびえ、周辺四方は険しく、地勢は厚深です。甘泉があり景色もどこまでも広がっています。伏して乞い願います。

石を運び垣を築き、城をこの山に建てることは、なんと良いことではないでしょうか」と言った。按司は大いに喜び、兵士を引き連れ、その山に登ると、弓矢を取り四方に放ち、その土地の良さを理解した。そこで、その山の神を他所に移し安置してから城を築こうとした。突然、神託がありお告げして「元来、高山に居り、しだいしだいになじみ長いことになる。高い所に移して安穏をもたらしいてほしい。もし低い所に移すと、わたしの願いは叶わないぞ」と言った。按司はその神託の通り、神谷浜に行き、山の神を受けると、ほどなくして小舟を進め、計呂宇地泊に着くと、比嘉嶽に奉移した。この間、武久知樽金に城壁を建てさせた。竣工の時を迎えると、按司は吉日を選んで城を遷し、ただひとり権勢をほしいままにすることになった。広い範囲にわたって人民を支配し按司と自称したのである。

この時、中山では大軍を遣わし、久米島に到着すると、ただちに仲城按司を攻めた。しかし、按司は堅固な城郭に頼り降伏しようとしなかった。官軍もまたその城が攻めにくいので、兵士を退かせ、まず具志川城を攻めて戦った。数日も経ずして、官軍は大勝利を収めた。このことを聞いて仲城按司は大いに驚き、一幼児を堂の比屋に預け、喜志良思嶽の中に逃亡し、行方知らずとなった。そして、城もまた滅亡したのである。

堂の比屋は幼き按司の子を育てることとして自分の家で養育し、さらにこの子に父のつとめを継がせようとした。その後、中山の王は按司の子を盛り立てて城主にしようとした。すると、堂の比屋に謀反の心が芽生えた。そして、その幼子を呼び、詐って髻を結う様子を示すと、その瞬間に刀を抜いて斬首し、急病で死んだと言った。そうして主殺しの悪名から逃れようとしたのである。そうして比屋は中山に参内し、久米城守にしてくれるように請願した。やがて暇を乞い帰郷する時になり、人々はみな久米島の真謝の津に出て比屋を迎えもてなそうとした。比屋はおのずから威勢を笠に着て振る舞い、その答礼は大変不躾なものであった。すぐに乗馬に鞭を加えて走らせ、城門に入ろうとしたその時、なんと、その馬がつまずき地面に脚をぶつけ倒れてしまった。比屋はもんどり打って落馬し、腰に下げた刀が刺さって死んでしまった。

後世の人は、なおも按司の霊骨を神として崇信している。(『遺老説伝』巻1第49) [12]

中城の落城後、「堂の比屋」が引き取っていた按司の子が中山によって中城城主に任じられることを知ると、これを弑逆して中山に取り入り、代わりにその地位を得たが、意気揚々と入城しようとしたところ横死するという筋は「久米島具志川間切旧記」と変わらない。

ところで、同旧記によれば、それ以前、中山の軍勢は中城・具志川城の攻略に失敗して島から退去しており、征服に失敗していたのである。中城按司に迫害され伊平屋島に逃れていた具志堅三兄弟が加わることによって、はじめて中城城内を炎上させることができ、具志川城では按司の乳父(めのと)の「よなふしのひや(世那節大比屋)」の裏切りで城の水源を絶ち、ようやく陥落させることができた。伊敷索按司が次男の乳母の夫としてよなふしのひや(世那節大比屋)に目を掛けていたことを読み取ることができるが、これも土着の有力者を懐柔する手段だったのかもしれない。『球陽』の附記「久米島始建具志川城」は断片的な記述に止まっている。これに対して、旧記は、首里王府と久米島との間にあった緊張関係と久米島内部の複雑な権力構造を示唆している。『遺老説伝』では、『球陽』の附「久米島始建具志川城」に比べ「史話」として完結した内容になっているけれども、具志川城のくだりでは按司の乳父について触れず、旧記の示唆するところは『球陽』以上に捨象されている。

他方において、中城の築城にまつわる山神のくだりは不詳の地名もあり現存の旧記に見られない。ただ、「久米島仲里間切旧記」に「鴫尻村比嘉御嶽之儀、むかし久米中城御嶽ゟ御神御移、御嶽ニ成候由」とある記事と対応しているようであり、この比嘉嶽のある場所は「頂上が三角形になった、一番高く見える山だという」[13]ので、神託に応えたことになるのだろう。しかし、いかに要害の地に築城しても、守り神を敬して遠ざけるよう

な行為には、いずれ滅びるという命運が暗示されているかのようである。

なお、『おもろさうし』の久米島の支配者を称えるオモロには「真物若てだ」「かさす若てだ」(第11の568～570)という呼称がある。『遺老説伝』において、それを彷彿とさせるのは、伊敷索按司に迫害された末子の笠末若茶良（さすちやら）の史伝である（巻1第50話)。

> むかし、久米島の登武那覇の地に笠末若茶良という者がいた。彼こそすなわち伊敷索按司の四男である。その人と為りは、度量は広くて奥深く、居動は常人と異なり、その行いは全て仁義に適うもので、いつも落ち着き払っていた。それで、君真物の神が時々出現し、その品行を大いに賞賛することがあった。それを見た父は、憎み嫉みの感情を抱き、人知れず邪な計略をめぐらし、彼に濡れ衣を着せて殺そうとした。その妻はそれをいさめて言った。「この子には罪などありません。どうして亡き者にしようとするのですか」。こうして、何度も固くいさめ続けた。伊敷索は激怒し、おのれの妻子を粟国島に放逐しようとした。そして、伊敷索はみずから軍勢を率いて登武那覇に前進し梶山門に攻め入った。不意のことであったので、若茶良が逃げ出すことはまことに困難であった。そこで、刀を引っ提げて応戦し、敵の一隊を殺傷して退かせ、登武那覇から出て逃亡しようとした。その父は軍勢が大敗したのを見て、馬を進ませて疾走したが、やがて平良原を過ぎると、突然、立増田の中に落ち込んでしまい楯で顔を覆い隠れた。若茶良は馬から下りて急いで駆けつけ、みずから父の手を取り、泥の中から出るのを助け、水を担いで来て、父の体を洗った。そして、ようやく父に向かってこう言った。「父が子を殺そうとしても、もとより子に父を亡き者にしようとする意志などありません。今、兵士達を殺したのは、ただ自分に向けられた鉾先から身を守ろうとしただけです」。そうして父を伊敷索に送り届けた。
>
> ある日、若茶良は母上の御機嫌を伺おうと思い立ち、小舟に乗って粟国島に行こうとした。沖に出ると、にわかに逆風に遭い漂流して拝崎で坐礁した。すぐに降口の地に行き、しばらくそこを仮住まいにすることにした。宮平の村民はそれを見て、粥を送り救った。この時、平度比屋という者がいた。生まれつき邪悪で陰険な性格で、平気で悪事をはたらくのであった。若茶良の舟が座礁し、降口の地に寓居していることを聞くと、若茶良の父に告げて言った。「今や若茶良の死期はもう迫っております。どうしてこの時に乗じて彼を殺さないのですか」。父の按司は大変喜び、選りすぐりの兵士を急いで集め、若茶良を捕まえようとした。若茶良もまた彼らと戦い、殺した兵士は数えきれないほどであった。若茶良は勝利を収めたけれども、体にやや刀傷を負ったので、激しい恥辱を感じた。そして、天を仰き嘆息してこう言った。「我が命を救ったのは、宮平の村人である。我を死に追いやったのは、平度比屋である。願わくは皇天后土よ、二人の心根を鑑みて、善悪の報いを賜われ。たとえ我が身は冥土の底に落ちるとも遺恨なし」と。ついにおのれの首を自らはねて死んだ。
>
> 後に二人の子孫には明かなしるしが生じた。宮平の村人は子孫が多く繁栄した。平度比屋の一族には痢症にかかる者や毒蛇に咬まれる者が出た。村人は特別に若茶良の霊骨を登武那覇に葬った。後世、霊験がしばしば現れ、ついに神嶽とし、人々はみな崇信するようになった。(『遺老説伝』巻1第50話)[14]

この話によると、笠末若茶良の器量と人格を褒めて君真物神（君まもの：キンマモン）がその前に出現したという。ここでは、子をねたみ憎む不仁の父と孝順な息子との相克が描かれている。また、妻の取りなしに逆上して妻子を放逐するような按司の横暴な人間像が浮き彫りにされている。この話は「かさすわかちやら」を「いしきなは按司四男」とする「久米島仲里間切旧記」を敷衍したものである。同旧記では「彼人、世人ニ相替、姿厳敷有之、君まも之時、いしきなは按司ゟ先立、かさす若ちやら江君真もの御向被成候ニ付、いしきなは按司、伊勢子息ニ被超候を猶被思召、其ゟ悪心出来、かさす若ちやらを可討企被成候故、無罪討候企有間敷由、内儀ゟ按司江異見被申候を、

立腹ニ而、彼内儀は故郷粟国嶋へ被召渡」とある。キンマモンが按司を差し置いて笠末若茶良の前に出現したこと、按司を諌める妻（内儀）が粟国島に追放されていたことなど、筋はほぼ一致している。笠末若茶良の住居があったという登武那覇（とんなは）は仲里間切にあるので、当地の人々にとって崇拝の対象になっていたことも同旧記の通りである。

ただし、異説もある。地域の異なる「久米島具志川間切旧記」では、「此がさすちやらハ、美男殊人勝有之候処、神代ニきみまもの時、老若男女きみまもニハ不向、このかさすちやら按司ニ相向候故、御継母虚言を構ひ、御父いしきなは按司江讒言ニ付」とあり、美麗な笠末若茶良がキンマモンの出現よりも人々の注目を集めたことが、伊敷索按司の不興を買った理由とする。また、その正室が妾の身分である笠末若茶良の母を粟国島に追い出したり、笠末若茶良について讒言したりしていたことが記されている。こうした側面が示されない「久米島仲里間切旧記」と『遺老説伝』では、伊敷索按司当人の専横な性格と行いがより一層強調されているといえよう。

さらに、『遺老説伝』では、笠末若茶良について「仁義」という人格的な資質を示し、後代まで呪いと福を及ぼす笠末若茶良の最期は、「皇天后土」に求め訴える姿に改変され[15]、漢語による表現にともない、儒教的な倫理観が込められ中国的な所作（仰不慚于天）が念頭に置かれている。その上で、笠末若茶良の遺骸が「霊骨」として登武那覇（とんなは）に葬られ、その地が「神嶽」になったことを記して結びとしている。巻1第48話では中山によって滅ぼされたという伊敷索按司が久米島の「世の主」としてイベ（御嶽）で島民に祭祀されていることが明記されており、巻1第49話文末の「按司霊付」も「久米島具志川間切旧記」に「御子中城按司、くし川按司御孫御亡候付而、もはや無頼方被思召、御病死為被成由、相伝申候」とあることを合わせ考えると、堂の比屋ではなく伊敷索按司のものを指すのであろう。

以上、旧記と対照することにより、史話・史伝としての『遺老説伝』の説話の特色を明らかにしようと試みた。久米島の支配者について言えば、その編纂者は、城塞と御嶽を拠り所に島民に伝承されている記憶（遺老の説伝）を中央の統治者の立場で構成した史話・史伝に置き換えたのである。その中の人物像は『おもろさうし』より具体的であって、個々の性格や感情が表現されている。ただし、そのコンテクストとは、滅ぶべきものが滅ぶべくして滅んだというものである。また、尚真王以前のこととして読まれてもかまわない位置づけである。概して、『遺老説伝』には、旧記等を史料として扱い、異説を整理し、史実を確定して叙述しようとする意図は希薄である。地方の歴史的人物は、中央の倫理的観点から類型的に扱われている。もし、旧記が湮滅していたならば[16]、中央で構成した史話・史伝のみが島の歴史と人物を語るテクストになっていたはずである。

3．沖縄本島中南部

『おもろさうし』では沖縄本島を上下に分けているが、下は中南部の地域であり、「真物世の主」など按司を称えるオモロは北部に比べ圧倒的に多い。玉城（巻1第8話）は「島中」という別名をもって謳われる（第6の309）。『遺老説伝』には、この地域の按司をめぐる話も掲載されている。これは、沖縄本島南端の米須（こめす）地域を舞台としたものである。

> 大昔の時、米次按司という者がおり、米次城を居城としていた。その夫人は節操堅くおしとやかな性格で、その度量には賢く機敏なところがあった。さらに傾国の色香を漂わせる絶世の美人であった。ある日、我瀬の子（し）という者が突然その姿を見て、ひどく思慕するようになった。あせりいらつき身も心もやつれ、一日を過ごすことがまるで一年を過ごすように長く感じられた。急に絶好の悪だくみがひらめくと、按司の館に参上し、こう言った。「今日は、天気は晴れて雲も少なく、波は静かで風も穏やかです。カモメは砂浜の上を飛び、魚は海面に群れていて、とても素晴らしい光景です。是非、海に行き漁をして楽しみましょう」。これを聞いて按司は喜んだ。夫人はそれを止めるよう言った。「わたくしは、昨夜、夢を見ましたが非常に悪いものでした。舟が顚覆して溺れるのではないかと思います。漁に出かけて遊ぶようなことはしては

なりません」。強い調子で按司に忠告したが、按司は聞き入れようとしなかった。とうとう、我瀬の子と一緒に海岸に行き、網を打ち魚を採りだした。按司は漁に夢中の余り、ほかには一瞥もくれることがなかった。そこで我瀬の子は銛を直ちに抜き出して按司を刺し殺し、その遺骸を海中に放り捨てたのである。かたわらでそれを見ていた人は歯ぎしりして憎んだものの、口を閉ざしていた。ただ、密かに夫人には伝えた。夫人はこれを聞くと哭慟し、限りが無いほどであった。そして、非常に意外かつ不審に思った。そこで人知れず城を離れて隠れ住んだ。我瀬は嬉しくてたまらず、米次按司の夫人を自分のものにしようとした。按司を殺してからほどなく按司の館に来たが、夫人は逃げ出しておりいなかった。そこで、ただちに按司の立場で檄文を各地に出して行方を探し求めた。夫人は塩を売る婦女に扮装し、時機をうかがい仇討ちをすることにした。方々を巡り歩いていると、我瀬に偶然出会ってしまった。我瀬は商いの婦女ではないのではないかと疑い、近づけて子細を観察し、再三にわたって尋問した。そうして当の夫人であることが分かった。按司の館に入るように強要し、強引に邪な関係を結ぼうとしたが、夫人は従おうとしなかった。我瀬は激怒して剣を手に取り、刺し殺そうとしたが、夫人は死を恐れず自分を刺すように言った。我瀬は刺し殺すわけにもいかず、力ずくで人倫に背く関係を結ぼうとした。そこで、夫人は騙してこう言った。「按司はお亡くなりになられましたが、まだ幾月もたっておりません。わたくしは、ここに住んだまま道にはずれた関係をもつことに耐えられません。必ず吉日を選んで一緒に某山に行き、そこで木を切り倒し屋敷を建てたなら、あなた様の言うことに従いましょう」。我瀬はとても喜び、日取りを約束した。その日になると、夫人は一人の女児を連れて密かにのみ一丁を懐き我瀬嵩に登った。我瀬に酒を飲むように勧めると、我瀬は欣然雀躍として大喜し、ひどく酒に酔った。夫人は我瀬に両手で樹木の回りを抱いて材木の太さを計るように言った。我瀬が夫人の言いつけを聞いて空を仰いで樹木を抱くのを見ると、夫人は密かにのみを出して我瀬の交差した手の甲に打ち込んだ。我瀬は自分を罰して命だけは助けてくれるよう乞うたが、夫人は何度もののしり責め立て、ついに我瀬を刺し殺し、按司の仇討ちを果たしたのである。けれども、これまでに長い歳月が経っており、このことを考証してより詳しく知ることはできない。(『遺老説伝』巻1第25話)[17]

米次城は、『琉球国旧記』巻5において六つの古城の一つとして挙げられており、これと同じ内容の話が掲載されている。先行する『琉球国由来記』には「往古、有米次按司旧跡。詳ヨヤノ誦文見タリ」(巻12各処祭祀、摩文仁間切、米次村、旧跡)とあり、地域の伝承を取材して作成されたことが窺える。

次の話は、首里のすぐ西方にある西原に城を構えていたという、ある按司の行状を記述するものである。

むかし、西原間切に幸地城があった。その城主の名は熱田子と言った。その勇猛さと力は卓絶しており、人々は熱田子(あつたし)を恐れていた。城の隣に津記武多按司(つきよたあじ)という者がおり、熱田子とは互いに激情を交えながらつき合う仲であった。熱田が津記武多按司の夫人を見ると、非常にあでやかな容姿をしており、それ以来いつも気にしていた。ある日、魚釣りから帰る時に、その夫人が亨良佐井で髪を洗っているのを見かけた。熱田はその背後にこっそり忍び寄り、足の指で夫人の尻をさわってからかった。夫人は怒って津記武多按司に知らせた。按司は大いに怒り、はかりごとを巡らせようとした。しかし、彼の勇猛ぶりを恐れ、兵士を動かし事を構えることをしなかった。熱田は按司の怒りを知り、ついに策士を招いてはかりごとを企てた。もし早めにはかりごとを行わなければ、相手から害を受けるだろうということで、こちらのはかりごとはかくかくしかじかと決めていった。そうして、按司のもとを訪ねた。按司が酒席を設けて彼をもてなすと、熱田はこう言った。「按司には一振りの宝剣があると伺っておりますが」。

そして、一目見せてくれるよう頼み込んだ。くだんの宝剣を手に取ると、これを振り下ろして按司を真っ二つに斬り捨て、むやみに家中の人々の命を奪った。ただ按司の夫人だけを生かして妻にすることだけを考えていたのである。夫人は河に身を投げて亡くなった。このことを聞いて今帰仁按司は激怒し、みずから大軍を従えて熱田を征伐し処罰しようとした。風雲急を告げるも、幸地城内の兵士はわずかであった。ここで熱田は一計を案じた。出迎えて謝罪し、城内に入るようお伺いし、盛大な酒宴を設けてねぎらったのである。今帰仁按司の三つの軍勢が大いに酩酊して帰ると、熱田は自分の兵士を翁長村の北山に待ち伏せさせて彼らを殺した。今帰仁按司もここで討ち死にした。この北山の名を今帰仁山と言うのはそのためである。この時、按司の長が四人おり、協議して兵を挙げ討伐し罰を与えることになった。こうして熱田はついに滅亡したのである。その墓は石嶺御嶽の東にある。今でも、その末裔が翁長村には多く居て墓を守っている。(『遺老説伝』巻3第103話)[18]

かつて、本島南部においても、按司の地位を簒奪する者がおり、按司同士の抗争があった。後者の話では、今帰仁按司が首里に隣接するところまで兵を進めているのに、これに対する首里王府の対応は明確ではない。いつの事件なのかもとより不明であるが、今帰仁グスクの落城以前（1416年）のことであることは十分窺える。しかしながら、米次按司や幸地城主のような存在は、その滅亡が首里中心の歴史の流の中に明確に位置づけられた、北山王（尚思紹王11年:1416)、南山王（尚巴志王8年：1429)、中城グスク・勝連グスク（尚泰久王5年:1458）の城主とは扱いが異なる。それでも、米次按司は当該の人物かどうか別として『おもそさうし』第8の409に謳われる存在であるし、熱田子については『遺老説伝』編纂の時点で墓があり[19]、それを守る子孫が存在するという、歴史を偲ぶ拠り所があった[20]。この二つの話に共通するのは、ある邪なあるいは粗暴な男が夫を亡き者とし美しい人妻を手に入れようとしたが叶わず、かえって仇討ちされたり攻め立てられたりして滅亡することである。なお、米次城について、『琉球国旧記』巻5と『遺老説伝』の文章には差異がある。前者では俗諺としており、「遂に刺死するを到す」の後に「いまだ何なる代に築くか知らず」として結んでいるが、後者では「以て按司の仇に報ゆ」としている。『遺老説伝』の断片的な史話には、中山による政治的統一と安定がもたらされる以前の奸知や暴力が物を言う時代であっても、不義の者が栄えたためしはないという、道義的な主張が込められているように思われる。

結語

以上、本島周辺の島嶼を中心とする『遺老説伝』中の史話・史伝を検討してきた。それは旧記という各地域から提出された伝承を参照してはじめて成立したのであるが、その際に中央の立場による改変も加えられている。しかも、一話として完結した内容となり、旧記が失われた場合、文字による唯一の伝承となる可能性があった。久高島の場合、それに該当するように思われる。これに対して久米島と宮古島では、現存する旧記によって取捨選択された部分や換骨奪胎された主題を明らかにすることができる。『遺老説伝』の説話の地域的分布では、宮古島に関するものが多く、当地は、独自の歴史が長期にわたって展開した地域である。ただし、宮古島を舞台とした説話が多いからといって、その歴史を語ることが構想されていたのかどうか、慎重に考えるべきである。さらに、改変された意図や意義について検討することは、近世琉球のイデオロギーを読み取る上でも重要な作業となるだろう。厳密な史書ではない本書は、宗教的な縁起や断片的で改変された史話・史伝を物語ることを通して、編纂された同時代とそれ以降の世代に道儀を説くことも意図されていたと考えられる。もとより、説話には面白味を感じるという要素が不可欠である。『遺老説伝』もまた様々な説話による、様々な要素が内包されているはずである。それでも、為政者の意図と全く無関係の市井の読み本とは異なる存在であることを看過することはできない。

1 本稿では、外間守善（校注）『おもそさうし』岩波書店、2000年を参照している。

2 一往古之世、玉城郡百名邑、有一男人。乳名白樽。賦性至孝、操心仁義。恒為善事、不敢為悪也。玉城按司、深褒美之、遂以長男免武登能按司之女、娶為他妻。一日夫婦、同出野登山、玩楽光景。忽看東溟之中、有一小島。隠見波濤之間、白樽深奇且怪。時時出行其野、用心看之。日晴雲散。風和波静、則現在一島。隔海甚近。此時威勢相競、干戈未弭。於是乎、白樽深厭此世変乱、要以遁去海島。夫婦相共商議、即乗小舟、向東而行、未一瞬息、早至他島。繋舟上岸、遍巡四境。泉甘土肥、野曠山低、宜設邑構家、以為栖居。而今没有食物。日出海辺、拾取螺貝、以致日度。由是夫婦共到伊敷泊、以祈子孫繁衍、食物豊饒。未尽祈畢。倏有一白壺、随波浮来。白樽揚衣入海、要撈其壺。湮没波間、不肯看見。婦女至屋久留川、沐浴其身、改穿潔衣、亦行他浜、展開衣袖、以俟白壺。白壺自来袖上。婦女喜執其壺、挖開其蓋、内載麦三種（一小麦、一葉多嘉麦、一大麦）、粟三種（佐久和、餅也、和佐）、豆一種（俗叫小豆）、即播其種于古間口地。節届正月、麦穂出発、甚異常麦。白樽深奇異之。奉献之於禁城。至于二月、其麦已熟。恭択吉日。奉献其麦。王深喜之、而頂戴之。即令人釀神酒、以祭各処森嶽。次賜百工。従此之後、五穀豊饒、子孫繁衍、遂以為邑。名曰之久高島。其長女於戸兼専任祝女職、掌各嶽祭祀。長男真仁牛襲父家統、其子孫延至今世、為外間根人。二女思樽為巫女、遂擢禁城巫女。日夜栖居城内、其為人也、生質貞静、容貌美麗、迥異凡人。王召入内宮、為王夫人、深蒙寵愛。栄光已甚。於是乎、思樽懐胎。由是諸妾嫉忌之。不敢相交話。一日思樽夫人、謬致放屁。諸妾欣欣然而喜之。将其謬事、時時相話、以為哂笑。思樽夫人難侍御前、遂告暇回郷。荏苒之間、歴閲数月、已当臨盆月。思樽意想聖主後胤。生産穢処、恐有獲罪、另設一座（至今外間根人家、其産座猶存）、隆誕一男、名曰金松兼。長成七歳、屢向母問父。思樽兼夫人、只答汝為無父、我一身而出耳。年已八歳、頻問父親曰、天以陰陽而生育万物者也。況人皆有父母。何以独身無父。伏乞悉告愚父。思樽夫人答説如前。金松兼再三強問。思樽夫人、不敢戸告知。思金松兼曰「人不知父、不得為人。活生無益、何不早死哉」。遂朝夕絶食痛哭。於是乎、思樽夫人、深憫其絶食。細告蒙寵見嫉事。自始至終。説知一遍。然汝素生海島、衣服容貌、不像京都。雖有拝睹天顔之願。不能遂志也。故此前日問訊、不敢告知也。思金松兼聞之、即到伊敷泊、仰向東方曰「母侍王側、懐妊愚身。倏有小過、告病回郷。今予長成鄙邑、心志不安、伏祈天神地祇。鑑此悃忱。垂憫小幼。得入朝聖主。隆恩無既」。毎朝告祈。不敢懈怠。次至七日、清晨有黄金一物、発大光耀、随波浮来。思金松兼深奇怪之、亦展衣袖撈之。即黄金瓜子也。思金松兼大歓喜之。即懐其瓜子。告母赴京、即刻起身、入城請朝。禁城役人、或晒髪赤衣粗、或貴嬬童妾進城内。思金松兼容貌躋躋。威儀蕩蕩。不稍驚惶之気。専請入覲題奏。諸役人深奇怪之。遂聞之於内院。召入御前。思金松兼直出其瓜子于懐内、以為献上曰「此之瓜種者、国家至宝也、世界罕有也。蓋天降甘雨、肥土已潤時、特未放屁之女、播植此種、則蕃衍茂盛。結実甚夥」。王大笑之曰「人生此世、誰不放屁哉」。思金松兼曰「人有放屁、何咎之有」。即王聴其言。深至内院。召入思金松兼、密問其縁由。思金松兼細奏其母放屁回郷、出産愚身之由。王聞其事。要以栖居城内。然東海小島。外夷孫童。難以急隆為男。暫回故郷、以俟時候。厥後王無有世子、遂召思金松兼封為世子、即践大位。由是聖主二年一次、親幸久高島、且毎年一次、外間根人並祝女由御仲門、恭献魚類数品、則祝女召入内院。恩賜盛宴。及茶葉烟草等物、根人亦賜御玉貫一双。康熙庚子、裁去其献物云爾。

3 小島瓔禮（編）『神道体系　神社編52　沖縄』（神道体系編纂会、1984年）所収。

4 注3前掲書、54-55頁の解題を参照。

5 この黄金で倭の商船から鉄を買い、「農耕ノ者ニハ鉄ヲ与ヘテ、農器ヲ作ラセ」たという。『中山世鑑』巻2参照。

6 一往昔之世、聞得大君加那志、帯侍女数十、坐駕海船、赴久高島、以行祭祀。往抵中洋、陡遭逆風、漂至日本。已経歳月、杳然無跡。是時琉球早魃甚極、五穀不登、民人困苦。由是、招集諸覡巫覡、頻頻問之。覡巫僉曰「想是聞得大君加那志為風所漂、滞在他国之故也」。一日有君摩物神曰「今大君加那志、逗在日本。汝等須早撥船、往至日本、以為迎回。于是、場天祝女、奉命為船頭、大城祝女為船筑、而帯女数十人、駕舟開洋（場天祝女出船時、許願沙明川而往焉。沙美川乃是場天祝女之父也）。赴日本国。順風吹起、不閲数日、直至一処、恭得覲大君芳顔。即場天祝女跪于御前曰「妾等特来此地、迎接大君加那志也。願早還故郷焉」。大君加那志、遂同他還棹、回至浜（一説回至斉場御嶽下待垣泊、未知孰是）。沙明嘉出於海辺、恭献酒盃、以為喜迎之礼。大君加那志、不欲帰本処、但於大里郡与那原村、結構宮舎而住居焉。後覺去于此、即取其霊骨、埋葬三津嶽。人尊信為神。又云、琉球海、原無多志好魚。場天祝女、自日本帯来此魚、而帰回琉球海。由是場天祝女、在場天浜時、此魚浮来于此浜。又在与那原時、亦浮于彼浜。但随其祝女所在而浮来焉。

7 『遺老説伝』巻3第122話では、頻繁に火災が生じる与那城間切の屋部村に「君真物」が出現し、村名を「屋慶名」に改めることを勧めたので、その通りにしたところ、火事がなくなったという。

8 伊波普猷「きみよし考」（初出1945年、『伊波普猷全集』第6巻、平凡社、1993年、収録）。

9 一、往昔之世、有伊敷索按司者。不知何人後裔也。嘗為久米島長、而生育四子。長名曰兼城大屋子。嘗卜地兼城村而栖居焉。即今久米島御蔵之地也。次名曰仲城按司。嘗築仲里城而住居焉。三名曰具志川按司。嘗為具志川城王［城主カ］也。四名曰笠末茶良。嘗住居于登武那覇地。其父伊敷索按司者、中山征伐久米島時、竟為官軍所滅、而葬之于伊敷索山。後人尊信之為神嶽。嶽有三神。一曰久米之世主伊部。一曰阿武来指笠伊部。一曰豊添之君伊部。

10 「琉球国旧記解説」七（横山重『琉球史料叢書』第3巻、1941年）。

11 仲原善忠は「比屋」が在地の有力者で、伊敷索の一族に服従させられていたことを指摘する。『久米島史話』附録

「堂のひやは一人なり」（初出 1940 年、『仲原善忠全集』第 3 巻、沖縄タイムス社、1978 年、収録）。

12 一、往昔之世、久米島儀間邑、有仲城按司者。此乃伊敦索按司第二子也。未為按司時、将建城于太城山。運石築垣時、忽有一婦女（名曰音知小堂之比屋婢女。走逃［逃の俗字］而隠栖焉）、自嶽中出来。乃告按司曰「小婢熟視此地。不如仲城山也。他山巍巍高聳、四囲嶮嶇。地勢厚深、能湧甘泉、而光景無窮。伏乞按司、運石築垣、建城于他山。不亦可乎」。按司大喜、率帯士卒、登視其山、即把弓箭、四射試之、知其善地。将其山神、移安於他、而築城于此。忽有神託宜曰「素住高山、相慣已久。請移徙［徙カ］高処、以致安穏。若移于卑処、不中吾意」。按司遂依其言、前往神谷浜、乃請其神。已駕小舟、至計呂宇地泊、奉移于比嘉嶽。既而令武久知樽金、創建城垣。至厥工告竣之時、按司択吉遷城、独擅威権。大蒞［涖の別体］百姓、自称按司。此時中山発大兵来、到久米島、即攻仲城按司。恃城郭堅固、不敢投誠。官軍亦以其城難攻、捨収其兵、前攻具志川城相戦。不数日、大獲勝捷。仲城按司聞之大驚、即寄一幼児於堂之比屋、逃入喜志良思嶽中、不知其所之、而城竟亦滅矣。堂之比屋、遂挙其幼子、養育之于家中、亦将此子継父業。其後王要立按司之子為城主。堂之比屋、忽萌異心、乃召其幼子、詐為結髪之状、即乗其時、抜刀斬首、曰忽然染病而卒。以避殺主之名。而比屋入覲于中山、請為久米城主。已当乞暇帰郷時、衆人皆出于真謝津、而迎接比屋焉。比屋自恃威勢、答礼甚踈、即加鞭馳馬。将入城門。不想、其所騎之馬、脚跌撲地而倒。比屋便翻身落馬、遂為其所帯之刀、被刺而卒焉。後世之人、仍以按司霊骨為神而崇信焉。

13 鳴尻（島尻）は久米島東南端の集落である。『仲里村史』第 6 巻（2001 年）38-37 頁、「ヒーザ御嶽」を参照。

14 一、昔久米島登武那覇地、有笠末若茶良者。此乃伊敦索按司第四子也。其為人也、器量宏深、居動異常。而其所為者、皆循仁義、不敢乱行也。故君真物神、時有出現、深嘉其行。其父見之、心懐嫌嫉、暗謀奸計、欲誅殺之。其妻諫之曰「児子既無罪。何欲害之耶」。屢次固諫。伊敦索大怒、即逐妻于粟国島。而伊敦索親率衆軍、前往登武那覇、攻入梶山門焉。若茶良以其事出于意外、誠雖逃去。提刀拒戦、要以殺退一陣、出外逃去。其父見兵勢敗績、撥馬跑走。已過平良原、忽陥于立増田中。以楯覆顔而隠居焉。若茶良下馬急来、自把父手、扶出泥中、即担水来、沐浴其父。乃向父曰「雖父欲殺子、子素無害父之意。今所殺衆卒。只為防其鋒也」。而送至伊敦索。一日、若茶良欲問候母親起居。已駕小舟、赴粟国島。往抵中洋、陡遭逆風、漂至拝崎、擱破船隻、即到降口地、而暫栖焉。宮平村民見之、送粥救命。当此之時、又有平度比屋者。此人賦性奸険、為悪無忌。爰聞若茶良衝礁覆舟、暫住降口地、乃告其父曰「今若茶良死期已至矣。何不乗此時而殺之」。父按司大喜、急発精兵、欲擒擄之。若茶良復与他相戦、殺尽兵卒、不知其数。若茶良雖已獲捷勝、身以小受刀傷。深致愧慚、乃仰天発歎曰「救我性命者、宮平村人也。使我致死者、平度比屋也。願皇天后土、実鑑二人之心、賜善悪之報。吾身雖至于九泉之下、無有遺恨矣」。遂自刎而亡。後二人子孫、果有明験。而宮平邑人子孫繁衍。平度比屋一族或染痢症、或遭毒蛇焉。故村人以若茶良霊骨、葬于登武那覇。至于後世、霊験屢現、遂為神嶽。人皆崇信焉。

15 これは恐らく琉球の天（オボツ＝カグラ）と地（ニライ＝カナイ）の神祇観念を漢語化したものである。

16 仲里間切の旧記は、昭和 11 年（1936）に同島仲里真謝出身の仲原善忠（1890 ～ 1964）によって発見された資料である。具志川間切の旧記は同氏の弟が同治 3 年 1864）の写本を昭和 13 年（1938）に書写したもの。いずれも琉球大学附属図書館仲原善忠文庫所蔵。

17 一、往古之時、有米次按司者。嘗居于米次城。其夫人質資貞静、器量敏捷、而有傾国之色、絶世之姿。一日、我瀬之子、倏然見之、深以思慕之。焦心労辛、度日如年。忽起奇巧之謀。到按司府上曰「今日天晴雲収。海静風清、鴎翔沙上、魚戯波面、光景無窮。蓋往海漁魚、以為娯楽乎」。按司歓喜。夫人止之曰「妾昨夜見夢甚悪。恐有覆舟溺没也哉。不宜往漁以遊」。強請諫之。按司不敢聴従。遂同他到海、撒網漁魚。按司深貪漁魚、不肯窺見他処。我瀬之子、即抜取一鋒、刺死按司、擲棄海中焉。旁観之人、咬歯怨悪、不敢多言焉。密聞之於夫人。夫人聞之、哭慟甚極、大怪其異。窃出城外而隠居焉。我瀬喜悦、要侵其夫人、已至他府上、夫人逃［逃の俗字］去、不在其府。我瀬急発檄文、尋覓各処。由是夫人装扮売塩之婦、要得時報仇、以到巡行。偶遇途中。我瀬疑非商婦、召来身辺、仔細聡看、再三鞫問、而知為其夫人。強邀夫人於府上、亦要侵通。夫人不肯聴従。我瀬怒把一劒、将以刺死焉。夫人甘死請刺。我瀬不忍刺死、将以強奸。夫人乃騙言曰「按司已薨、未閲数月。妾不忍住此而奸淫也。必撰吉日、同往某山、伐木結宮、以聴汝言」。我瀬大喜、約定日期。已届其日、夫人率一女児、窃懐一鑿、同登我瀬嵩。覘他飲酒、我瀬欣然大喜、酩然大酔。夫人令我瀬両手抱樹、以鑿其材。我瀬領夫人命、仰天抱樹。即夫人密出小鑿、打穿他両掌上。我瀬請罪救命。夫人再三罵叱、遂到刺死、以報按司之仇矣。然歴年已久、莫従稽詳焉。

18 一、往昔、西原有幸地城。其主名曰熱田子。勇力過人、人皆懼之。隣有津記武多按司者。与熱田子、相交情熱。曾見按司夫人、甚有艶色、心常思之。一日釣魚回時、見其夫人、沐髪于亨良佐井。熱田従其背後、暗以脚指、摸其尻而戯焉。夫人怒以告按司。按司大怒、即欲謀之。只懼其勇、未敢動兵。熱田知之、遂召入謀士相議。若不早謀之、恐被其害、乃其謀如此如此。便往見按司。按司設酒待之。熱田曰「吾聞按司有宝劒一口。願求一看」。宝劒到手、便揮其劒、斬按司為両段、妄殺家属。只欲留其夫人納之。夫人竟自投河而死。今帰仁按司、聞之大怒、親携大軍討罪。鳴鼓急攻、城中兵寡。熱田忽生一計。出迎謝罪、請入城中、大設酒席犒之。今帰仁三軍、大醉［醉］而回。熱田伏兵于翁長村北山而殺之。今帰仁死于此。故名之今帰仁山。時有按司長四人、相約挙兵征罪。熱田遂亡。其墓在石嶺御嶽之東。今有其裔多在翁長村守墓。

19『琉球国由来記』巻 13、各処祭祀 3、西原間切、幸地村の頃に「石嶺ノ嶽」が掲載されている。

20 米須グスク（糸満市）と幸地グスク（西原町）の史跡がある。

本稿は、JSPS 科研費（課題番号 25370783）の助成による研究成果の一部である。